

3月2日、早朝の川越に着くと、まずは駅前の朝マックで腹ごしらえして、受付会場である川越湯遊ランドへ向かう。おそらくレース後のお風呂を心の拠り所にして走ることになるのだろうと想像した。当日は冷たく強い北西風が予想されており、長袖シャツにウィンドブレーカー、タイツの上に短パンという出で立ちで走ることに決め、靴は練習とウルトラ兼用の中でもわりとスピードも出せるものを選択し、スタート地点の川越熊野神社へ移動した。川越熊野神社は小さいながらも、地元では有名な神社らしく、スタート前にお参りしているランナーもいたが、銭洗弁天というカテゴリーなので、ご利益はあったのか後で聞いてみたいと思った。

これまでに30本近いウルトラマラソンを走ってきた。しかし、ロードでは112km、トレイルでは117kmのレースが最長であったため、203kmをどのようなペースで走ればよいのか分からなかったし、仕事で海外に滞在することが多く試走会にも参加出来なかったため、適当な予想タイムを設定して臨むしかなかった。とりあえず100kmのベストタイムを基準にして、プラスアルファを加えた24時間という目標タイムを設定してみたが、その計算がいかにかかったか、イヤというほど味わうことになる。

午前8時ちょっと前、知り合いのランナー同志がそれぞれ話で盛り上がり、開会式の声もほとんど聞こえない状況の中、軽い準備運動をしているうちに午前8時になり、いつの間にかスタートとなった。この緊張感の無さがスピードを求められるレースと大きく違うところで、私がウルトラが好きな理由の一つでもある。

川越の街におさらばし、田畑、工場といった見た目には何の魅力もないコースを進む。出始めは曲がり角が多く非常に間違いやすく、早速先頭集団がコースアウトしてしまい、タイムロスしていた。この大会は係員の誘導がないため、地図を見ながらコースを維持する必要があるが、やはり先行くランナーにつられてしまうのは人間心理なのだろう。畑から舞い上がる土が目に入らないように時々顔をそむけて走りながら、この先50kmにわたり、この向い風と戦わなければいけないのだと覚悟した。

午前9時52分、最初のエイドさくら堤(16.8km)に到着。いよいよここから荒川の河川敷となり、風を遮るものが何もない状態となる。思ったとおり、風は更にひどくなり、なるべく団子状態を維持してみても全く風よけの効果がなく、ただ共に同じ苦しみを分かち合うために寄り添っているという感じだ。そういえば荒川の下流のレースでも凄い風の時があったなと思い出したりしながらただただ耐えるしかなかった、この先どうなるんだろうと思いながら。

午前11時10分、河川敷にある熊谷エイド(28.1km)に到着。たった28km走っただけなのにダメージが大きい。巻き寿司といなり寿司をたらふく頂いて味噌汁も飲んだが、いつも疲労

した時に感じる寒気が襲ってきて動揺した。「くそっ、熊谷は日本の最高気温記録を持っているのではなかったか？」しかし春はだいぶ先ようだ。限界がくる前に対処しなければと携帯してきたジェルと固形タイプの栄養食品を補給して出発した。コースは北西から西へと針路が徐々に変わり、風がテイルになることを夢見て走り続ける。景色も徐々に変化して、古墳群や、名前は忘れたけど数学者の生家など見所も幾つかあった。南下する国道へと左折すればいよいよ風の恩恵を得られるようになり、久しぶりのエイドが待っている。

午後1時43分、玉淀エイド(51.3km)に到着。体が冷えきっていて気持ちもかなり萎えかけていた。ありがたいことにカップ麺を選ぶことができたので味噌ラーメンを食べることにした。しかし冷え切った体を温めるという目的は完全には果たせず、寒さへの恐怖から気持ちも少し冷めてしまい、完走への黄色信号が灯った。携帯栄養食品も補給して、追い風になることで太陽の暖かさを感じられることを期待することで、何とか重い体を起こして出発した。幸い5分走ると体が暖まり、寒気から解放された。この寒気から解放されるまでの5分間をこのあとレース終了までかなりの回数味わうことになるのをこの時はまだ気づいていない。次のエイドまでは約20km。これまでと違うのは、川越までの幹線道路を進むため、景色的には変化がない分、適当な間隔でコンビニがあること。飲み物の補給、トイレなど、コンビニのおかげで困ることはなかったし、「頑張ってください」と声をかけてくれる店員さんも多くいてとても励まされた。さらに「ゼッケンに200kmと書いてありますが、本当ですか？」「どこまで行きますか？」という質問も多かったと思う。奇人を見て目が点になるというのは言い過ぎだけど、質問してくれる店員さん達の表情が印象的だった。そして、トイレを借りられるか尋ねた時の店員さんの対応の素晴らしさに、日本のコンビニの質の高さに感動させられた。途中のコンビニで買ったリポビタミンDの助けも借りながら、単調なコースを走ってゆく。

午後4時20分、唐子エイド(71.9km)に到着。この頃には太陽は雲に隠れてしまい、寒さが厳しくなっていた。何を食べたか忘れてしまったが、ここで飲んだコーラを最後に冷たい飲み物はほとんど飲めなくなった。エイドでの休憩中に体が冷え切ってしまう、再び走り始める時の辛さが半端じゃなかったからだ。さらに唐子を出ると足の痛みが出始めた。特に足の裏側が痛い。止まってから走り出す時の一歩がすごく痛い。また、止まった時の体の冷え具合が更に悪化していった。あるコンビニに寄って、2本目のリポビタミンDを飲んだ時急激に寒くなり、あわててウィンドブレーカーの下にフリースを着たけれど、寒気が治まらない。もうこれらの滋養強壮剤も今後飲めないし、切り札のビールも飲めなくなった。走れなくなった時の復活アイテムが使用できなくなり、これから夜の走行となることを考えるとゴールが非常に遠くに感じられ、気持ちが落ち込む。完全に日が暮れてからはヘッドライトを装着して走る。走っている間は寒さからある程度逃れられるため良かったが、足の痛みが波のように寄せたり引いたりして時々歩かざるを得なくなった。しかし、止まること自体が寒さに対する恐怖と一体となっていたためなるべく徒歩の時間が最小で済むようにコントロールする必要があった。ランナーもまばらになり、夜の国道を一人さびしく川越に向けてひたすら進んだ。

午後7時01分、川越エイド(91.4km)に到着。室内で汗に濡れたシャツを変えてカップ麺を食べるために外に出た瞬間、凄い寒気に襲われ体が震え出した。震える手でお湯を入れたばかりのカップ麺を受け取り、慎重に膝の上に置くと震えが徐々に治まってゆき、気持ちも少しずつ落ち着いていった。そのとき滅多に現れない悪魔のささやきが聞こえてきた。「今やめれば、すぐお風呂に入れるし、この辛さから解放されるぞ」このささやきは今までの中では最強で、正直負けそうになったほど気持ちが折れかけていた。僕の後には川越に到着した選手がリタイヤを宣言した事も追い打ちをかけた。これから湯に浸かるその選手の姿を想像してしまい、そしてそれはとても魅力的だった。しかし、ラーメンをすすっていると僅かに気力が蘇っていくのが感じられた。体が暖まったのに加えて、着替えの際に飲んだベスパが効き始めたようだ。ベスパはかつてUTMBに出場する際に、友人がくれたアスリート用のスーパードリンクだ。UTMBでへこたれそうになった時、ベスパに救われた経験があったので、今回も未知の領域でもあるし、着替え袋の中に入れておいたのだった。聞くところによればこのベスパ、スズメバチ由来の天然成分の中に、感覚の一部を麻痺させる効果があるらしく、それが辛さを軽減させてくれるのかもしれない。ただし、1回分で700円以上もするほど高価なため、滅多なことでは買わない。さて、ベスパの助けも借りつつ、悪魔のささやきに何とか打ち克った私は、いよいよこのレースの本番である大江戸・東京へ向けて走り出した。

川越エイドを出てすぐのコンビニで、貼れるカイロを3個買い、腰、背中、お腹に貼り付けて武装完了。これ以上の対策はもう思いつかない。そんな心細い状態でまだまだ車の多い池袋方面への国道をひた走る。次のエイドまで約36kmもあるため、2回無料で食べられる「なか卯」とコンビニを上手く使いながら走らなければならない。夜の国道というこれまた特に魅力を見いだせない道をたんたんと走る。こんな時人は何を考えながら走るべきかとか考えてみたものの、目の前にある寒さと足の痛みという現実には目を奪われ、他のことに集中することができず、走っても走っても進まない感じがして、この区間は非常に長く感じた。そうすると、気分転換をするためには最初のなか卯に入るしかないと考えて、なか卯新座店を当面の目標としてとても長い道を走った。汗臭いランナーが食事をする店に入るのってどうなのかという心配があったが、なか卯新座店に到着し、その心配が杞憂であることが判明した。お客さんはみんなランナーだった。ランナーたちと談笑し、励まし合いながら牛丼とうどんのセットを食べ、身も心も暖まり、気持ちも新たに出發しようとして外に出た瞬間、激しい寒気と震えに襲われた。思わずなか卯に飛び込もうとしたが、戻ったところで問題を先延ばしにするだけであること、リタイヤするにしても自力で川越に戻るとなれば、必ずこの寒気と直面することになるわけだから、このまま走るしかないということに気付いた。5分間だけ耐えればいい、それを信じて走り始めると果たして5分後に寒気から解放された。足も痛かったが、寒さから逃れるためならば痛みは我慢できるということを知った。そして、これからは、この最悪の5分間を休憩の回数だけ味わうのだと覚悟しなければならなかった。成増のコンビニでトイレを済ませ、恒例の悪夢の5分間を乗り越えたと、下弦ちょっと前の月

が正面に浮かび、あまりの美しさに止まって写真を撮っていると体が冷え始めていることに気がつき、あわててカメラをしまい走り始める。危なかった、本当に油断できない。新宿に向けて走る間に日付が変わり、深夜でも明るい都内の環境に複雑な気持ちになっているうちに、いよいよ東中野駅を通過し、久しぶりのエイドが近づいていることにほっとする自分がいた。

午前1時22分、成願寺エイド(127.7km)に到着。法事の時の控え室に使うのだろうか、地下にある休憩所はしっかり暖房が効いていた。あまりの心地よさに外の事を一瞬忘れそうになったが、この後起こることを思い出し、暖かいスープと熱いゆず茶のみを口にした。しかし、外に飛び出す勇気を得るのに20分を要した。何とかエイドを出発すると、いよいよここからは大江戸名所巡りとなり、はとバスのようなコースを走る。係員がいないため、通過した証拠に指定されたものを写真に収めなければならない。写真を撮る必要があるのは①都庁②六本木ハイアット③東京タワー④浅草寺の四つ。人気の全くない深夜の都庁を過ぎ、おそらく最後に訪れたのが高校生のときだったと思われる表参道を抜け、六本木へ。もはや終電は過ぎているというのに、カップルや外国人で賑わう六本木は眠らない街だ。ゼッケンをつけて夜中に走っている我々は、彼らにはどう映るのだろうか、などと考える。六本木を後にすると急に人の数が減り始め、東京タワーに近づいたところから急に静けさが支配するようになった。東京タワーの写真は、タワーの根元にある南極犬の像を撮るのだが、こうしたものがあること自体知らなかった。東京タワー下暗し。東京タワーの次は皇居を目指す。祝田橋から皇居を反時計回りに走り、気象庁に近づくと、エイドであるこあしす整骨院はもうすぐだ。

午前4時15分、こあしすエイド(143.7km)に到着。お汁粉を2杯頂き、混み合わないよう早めに出発した。変化に富んだ都心のコースは何とか走れるのではないかと感じさせてくれた。皇居を後にし、日比谷、東京駅を抜け、浅草橋を通過する頃夜が明けた。今が最低気温であるはずなのに、なぜか勇気が湧いてくるから不思議だ。

午前6時11分、本所エイド(154.6km)に到着。何かの倉庫をエイドとしていて、開け放しのため寒い。でも石油ストーブの暖かさはありがたかった。シジミの味噌汁とカレースープのみ口にして体が暖まったものの、再び飛び出す勇気を得るのに時間を要し、結局体は冷えてしまった。本所エイドを何とか出発し、最初の曲がり角を曲がるとでっかいスカイツリーが出現した。自宅近くでランニングしている時に、江戸川河川敷からいつも見えているので、それで満足し、未だに行ったことがなかった。やはりでかい。更に進み浅草寺で写真を撮ると名所巡りは終了で、いよいよ川越に向けての最後の旅だ。浅草からは御徒町を通り、本郷で右折すると右手には東大の赤門がある。焼肉赤門は何度も行ったが、東大の赤門は初めて見た。赤門の近くでセルフエイドをひらく若い女性にホットコーヒーをご馳走になる。この人も東大生だろうかとか考えてみたりして楽しもうとしたが、この頃の足の痛みはかなりひどくなっていて、駒込までは歩いたりちょっと走ったりとなかなか前に進まなかった。よう

やく駒込駅に近づくと、最高のタイミングでなか卯駒込店を見つけて迷わず中に入る。ここも半分以上の客がランナーだ。親子丼と豚汁という最高の組み合わせで、筋肉披露を撃退しようとしたが、果たして著しい効果があった。奇跡の回復を遂げ、この効果は 185km 地点まで持続することになる。もっと早く親子丼を食べていたら、こんなに苦しまなくても済んだらうかなどと考えながら、軽くなった足取りで川越へ向かう。駒込駅、赤羽駅、高島平を通り、荒川の河川敷へ。また向い風が心配だったが、幸い昨日ほどひどくはなかった。このままゴールまで、といきたかったところだが、甘くはなかった。あと 15km という辺りで体が再び重くなり、足の痛みが再発した。しかも足の脛という新しい部位にも痛みが走り始めたため、残りは歩きになることを半分覚悟した。脛の痛みは骨膜炎かな？と思わせるイヤな痛みであったが、歩いている内に治り、走ると再発、というサイクルを 3 回繰り返したら全く痛くなくなった。こういう経験は今まで何度もあるが、この時その部位で何が起きているのかをすごく知りたいと思う。こうして走ったり歩いたりしている内にエイドのある橋が見えてきた。

午後 12 時 28 分、羽根倉エイド(189.3km)に到着。久しぶりにコーラを飲み、温かいうどんを食べてすぐに出発した。残り 13km は勢いで何とかなる道のりだと思ってしまうが、意外と遠い。川越バイパスに入ると、側道が整備されていて、サイクリングレーンと歩行者レーンが分かれているかなり立派なものだ。思考を無にして、気がついたらあと 3km というシナリオがベストだったが、1km 毎に表示される「川越市までokm」という丁寧な表示がそれを許してくれなかった。残り 10km でスパートをかける 2 名のランナーに尊敬の眼差しを向ける私にはもはや追いかける力は残っていなかった。マイペースで最後の 1 時間をゆっくりと走った。スタートのときはほとんど人を見かけなかった川越市内だったが、ゴールする頃には見所多い歴史の街として訪れたであろう観光客らしき人々で賑わっていた。その人々の間をすり抜けて、ちょっとだけペースアップして、手作りの小さいゴールゲートを通り抜けた。30 時間 38 分 35 秒、長い長い旅が終わった。

帰りの電車で、生まれて初めて寝過ごした。適当に設定した目標タイムを 6 時間半もオーバーした結果であったが、「これ以上無理！」というのが正直な感想である。心が折れそうになったことも一度や二度ではなかったため、我ながらよく完走できたと思う。特に最大の敵であった寒さは本当に辛く、UTMB で味わった時の恐怖に匹敵するものであった。それでもエイドを飛び出すことができた理由はたった一つ、「リタイヤしたくない」という願望だ。この願望がある限り、これからも過酷なレースを目指すに違いない。そして、走っている最中は全く考えなかったことではあるが、おそらく来年もこのレースにエントリーしていることだろう、装備にダウンジャケットを加えて…。